講演『21世紀の戦争論を考える　プーチンとロシア』を聴いて　　2022年10月25日　虎長

10月20日開催の、ノンフィクション作家保阪正康氏による講演と、それに続く茶話会(Q&Aセッション)に参加した。本稿は網羅的報告ではなく、いくつかの論点に触発されて書いた論考である。

1.「江戸時代270年と、明治維新以降の戦争体験が日本人の戦争観を独特なものにしている」との所論について：

講師は「江戸時代の平和が私たちの国における戦争概念を相当鈍感にした」とも著書に書かれている。この表現は「平和ぼけ」の原因としてネガティブに江戸時代をとらえているとの誤解を与えやすい。講演では「江戸時代の遺産を現代の戦争論・平和論に役立てるべき」と発言されており、実はポジティブにとらえておられるのだ。筆者もまったく同感である。ただ、「江戸時代の遺産が何で、どう役立つのか？」との質問への講師の回答は、修練としての武士道と各藩による安保体制・軍事研究であった。更に付け加えることがあると思う。講師が著書で指摘する、識字率の高さもその一つ。＝文化は平和な時にのみ育まれるからだ。

江戸時代の遺産として、筆者は更に次のことが重要と思う。(1) 武器を用いない偃武政治、(2)外国と戦争をしない、侵略をしない将軍家の伝統、これは石橋湛山の「小国主義」に通じる。(3)過度の中央集権とならない地方分権とのバランス、(4)天皇を鄭重に徳川幕府体制に組入れた「象徴天皇制」。柄谷行人は『憲法の無意識』において、戦国時代後の「徳川の平和」を、第二次大戦後の憲法九条による平和の先行形体と位置づけているが、筆者はこれに同意する。

2.「戦後、唯物史観が江戸時代を西洋封建制基準で低く評価してきた」との見方について:

筆者も同感である。しかし「農民が虐げられた暗い江戸時代」のイメージを国民全般へ植え付けた元凶は、むしろ自己正当化のために徳川体制を過度に「悪」とした明治藩閥政府による教育だったと思う。筆者も江戸時代が100%バラ色のパラダイスとは思わない。けれども徳川社会を支えた中間層にもっと注目して良いし、百姓一揆も体制変革運動ではなく領主からより充実した撫民を引き出そうとした運動という。これは山崎善弘著「徳川社会の底力」から学んだ。

3.　「事実を客観的に数値的に精査した軍事論、安全保障論が必要」との主張について：

講師は、旧日本軍部は主観を客観にすり替えた、戦後の我々の平和論も情緒的に過ぎた、として上記のように主張する。また、北朝鮮などのミサイルが日本に落下した場合の地域的・数値的な詳細シミュレーションが必要との問題も指摘。同感である。今日、日本のマスコミは自分の意見を表さず、すぐ軍事評論家を呼んで話させるが、その話の大半は兵器・戦闘力中心だ。もっと市民的発想があってしかるべきだ。迎撃・敵地攻撃を言う前に、日本海側に26基もある原発を早くなくすことの方が重要だろう。

原発にミサイルが落ちたり撃ち込まれたりしたら原爆を投下されたと同じになる。

4.　「核抑止力に依拠しない平和へ向けて、条約でなく世界憲法が必要」との提唱について：

講師は21世紀の戦争論の一環として、核兵器禁止条約を超えて、世界憲法策定を日本が提起すべ

きだと主張する。唯一の被爆国でありながら、アメリカに隷属して核兵器禁止条約会議にオブザーバーさえ出さない日本には、理想的過ぎて非現実とも見える。しかし、南極条約が非軍事化・非核化を採択するために日本は 1950 年代に主導的役割を果たしたといわれる。雑誌「世界」での大門正克「生きる現場からの憲法」で知った。

講師も言及されたように、政治を決着させるのが戦争であるというクラウゼヴィッツの戦争論を脱し、カントの永遠平和論を再検討した 21 世紀の平和論・戦争論が必要だろう。国連憲章と日本国憲法は精神性において共通点が多いが、広島・長崎原爆投下の前にできた前者より、その後にできた後者の方が先進的である。

戦争阻止の革命は、世界同時革命でなくても、日本による一国革命からはじめればよい。軍事力とカネしか頭にない「リアリスト」からは侮蔑されようが、それを超える力を示さねばならない。

日本国憲法を世界に実行することは、講師も紹介された柄谷行人の「交換論」によれば、「純粋贈与」であり、「準数位贈与」は何よりも強い力を持つ、とのことだ。　**以上**